

箱

崎

65

# 箱 崎 65

— 箱崎遺跡第 96 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1458 集

— 箱崎遺跡第 96 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1458 集

— ○ —

2 0 2 2

福岡市教育委員会

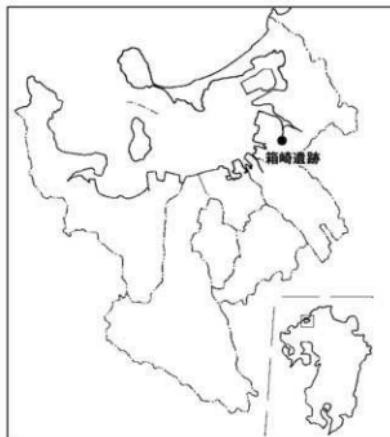
福岡市教育委員会



# 箱崎 65

－箱崎遺跡第96次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1458集



2022

福岡市教育委員会





1.SE02 出土青磁香炉 .SE03 出土青磁香炉 / 小碗 / 杯



2.SK45 出土青磁小碗



3.SE55 出土青磁小碗



4.SE15 出土陶器犬



5.SX34 出土白磁人物像





## 序

福岡市には、豊かな自然と、文化遺産がのこされています。地理的位置から、古くから対外交渉の拠点の一つとして大きな役割を担ってきました。

これら先人の遺産を保護し未来へと伝えていくことは、私たちの重要な務めです。

福岡市教育委員会では、開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存、出土遺物などの活用に努めています。

本書は、共同住宅建設に伴い、令和元年6月から9月にかけて発掘調査を実施した箱崎遺跡第96次調査の成果を報告するものです。遺跡のある箱崎は式内社筥崎宮の門前町として、さらには古代末から中世にかけて対外交渉の拠点として大きな役割を果たしました。今回の報告は筥崎宮周辺区域の調査で、調査成果は対外交渉史を解明する上での一助になるものと考えます。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、大英産業株式会社をはじめ、関係者の方々からご理解とご協力を賜りましたことに対し、こころからの感謝の意を表する次第です。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会

教育長 星子明夫

## 例　言

- 1 本書は福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市東区箱崎1丁目2928番、2929番1(地番)で発掘調査を実施した箱崎遺跡第96次調査の報告である。
- 2 本書で報告する調査の細目は下表のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査対象面積	調査面積	調査期間
1924	H K Z - 96	939.37 m <sup>2</sup>	448.43 m <sup>2</sup>	2019年6月3日～9月21日
- 3 本書に掲載した遺構の写真撮影・実測は調査担当の佐藤一郎、基準点測量は技能員の藤野雅基が行い、製図は整理補助員の島井幸代が行った。
- 4 遺物の実測は担当の佐藤の他、技能員の立石真二（石製品）、林田憲三（土製品・金属製品）、製図は佐藤・島井・立石が行った。
- 5 金属製品の保存処理・X線写真撮影は埋蔵文化財センター上角智希・藤崎彩乃が行った。
- 6 遺物の整理は整理作業員の島井・甲斐田嘉子が行った。
- 7 遺構は2桁の通し番号を用い、遺構の種類に応じてSD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑）の略号を番号の前につけた。
- 8 本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
- 9 本書の執筆、編集は佐藤が行った。

# 本文目次

I	はじめに	
1	調査に至る経緯	5
2	調査の組織	5
II	遺跡の位置と環境	5
III	調査の記録	
1	調査の概要	8
2	遺構と遺物	
	検出遺構	8
	出土遺物	17
IV	小結	31

# 挿図目次

第1図	箱崎遺跡と周辺の遺跡（縮尺 1/25000）	6
第2図	箱崎遺跡発掘区域図（縮尺 1/8000）	7
第3図	箱崎遺跡第 96 次調査発掘地（縮尺 1/1000）	7
第4図	箱崎遺跡第 96 次調査遺構配置図（縮尺 1/125）	9
第5図	掘立柱建物実測図（縮尺 1/100）	10
第6図	井戸実測図 1（縮尺 1/60）	11
第7図	井戸実測図 2（縮尺 1/60）	13
第8図	土坑実測図 1（縮尺 1/40）	14
第9図	土坑実測図 2（縮尺 1/40）	15
第10図	土坑実測図 3（縮尺 1/40）	16
第11図	井戸出土遺物実測図 1（縮尺 1/3）	18
第12図	井戸出土遺物実測図 2（縮尺 1/3）	19
第13図	土坑出土遺物実測図 1（縮尺 1/3）	20
第14図	土坑出土遺物実測図 2（縮尺 1/3）	22
第15図	土坑出土遺物実測図 3/ 土壙墓出土遺物実測図 1（縮尺 1/3）	23
第16図	土壤墓出土遺物実測図 2/ 溝・Pit 出土遺物（縮尺 1/3）	24
第17図	Pit・包含層出土遺物実測図（縮尺 1/3）	27
第18図	出土土製品・金属製品実測図（縮尺 1/3・1/2）	28
第19図	出土石製品実測図 1（縮尺 1/3）	29
第20図	出土石製品実測図 2（縮尺 1/3）	30

## 表 目 次

第1表 銅錢一覧表 ..... 28

## 図版目次

図版 1 1. 箱崎遺跡第96次A-1・2区全景（北東から）

2. 箱崎遺跡第96次B-1・2区全景（北東から）

3. SE06・07 井戸（南東から）

4. SE03 井戸（北西から）

5. SK11 土坑（東から）

6. SK12 土坑（東から）

図版 2 1. SE15 井戸（東から）

2. SE15b 井戸枠（東から）

3. SE30 井戸（北西から）

4. SE30 井戸枠（北から）

5. SE31 井戸枠（北から）

6. Pit95 土層（北から）

7. SE07 井戸（西から）

8. A-1区柱穴群（南西から）

図版 3 1. SA18（北西から）

2. SK14 土坑（北から）

3. SE16 井戸（北東から）

4. SK14 土坑下面（北から）

図版 4 1. SE04 井戸（北西から）

2. SE01 井戸（北西から）

3. SE06 井戸（西から）

4. SE03 井戸（西から）

5. SK10 土坑（南から）

6. B-1区全景（北東から）

7. SE42 井戸（北から）

8. SE33 井戸（南東から）

図版 5 1. SX34 土壙墓（北西から）

2. SX34 土壙墓完掘状況（北西から）

3. SE48/55 井戸（南東から）

4. SE38 井戸（南東から）

出土遺物

## I はじめに

### 1 調査に至る経緯

2019（平成31）年2月5日、大英産業株式会社から本市に対して東区箱崎1丁目2928番、2929番1（地番）における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会文書（30-2-1067）が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの箱崎遺跡の中央に位置する。埋蔵文化財課がこれを受け、同年2月18日に駐車場部分で確認調査を行った結果、地表下0.9m以下で遺構が確認された。申請者と埋蔵文化財は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積939.37m<sup>2</sup>の建物部分と立地駐車場部分448.43m<sup>2</sup>を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は同年6月3日から9月21日まで行われた。令和3年度に整理・報告することとした。

### 2 調査の組織

発掘調査委託 大英産業株式会社

発掘調査受託 福岡市

発掘調査（令和元年度）

資料整理（令和2・3年度）

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課 福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

課長 賀波 正人

賀波 正人

調査第1係長 吉武 学

本田 浩二郎

事前審査担当 田上 勇一郎（主任文化財主事） 事前審査担当 森本 幹彦（主任文化財主事）

朝岡 俊也（文化財主事）

山本 晃平（文化財主事）

発掘調査

資料整理

佐藤 一郎（主任文化財主事）

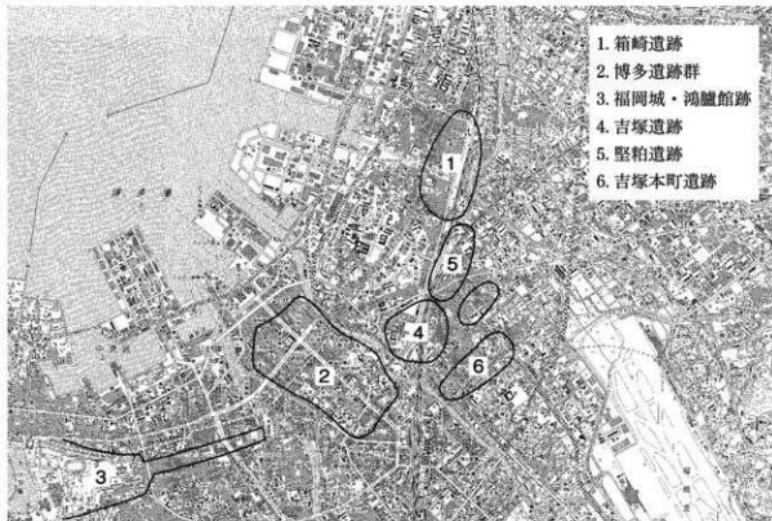
佐藤 一郎（文化財主事／再任用）

調査・整理の庶務は文化財活用部文化財活用課の松原加奈枝（令和元年度）、井手瑞江・内藤愛（令和3年度）が行った。また、施主の大英産業株式会社、施工の中村建設株式会社、地元箱崎1丁目町内の方々のご協力により、箱崎遺跡第96次発掘調査、報告書作成にまで至ることができたことに對し心から謝意を表する。

## II 遺跡の位置と環境

調査地は箱崎遺跡の南東、第21次調査地の南西に隣接する。箱崎遺跡は福岡平野の東部、多々良川水系の宇美川河口部左岸に位置し、博多湾岸に沿って形成された古砂丘上に立地する。式内社筥崎宮境内を中心とする東西0.6km、南北2.2kmの範囲に腹開する。西側は博多湾に臨み、東側は宇美川の氾濫により浸食を受けている。砂丘の南端については押さえられていない。標高を下げながら更に伸び南に位置する吉塚本町遺跡へと続く。遺構面は当時の海岸線に沿って帯状に分布する砂丘や砂州でつくられた第四紀層上部の箱崎砂層上面で確認されている。

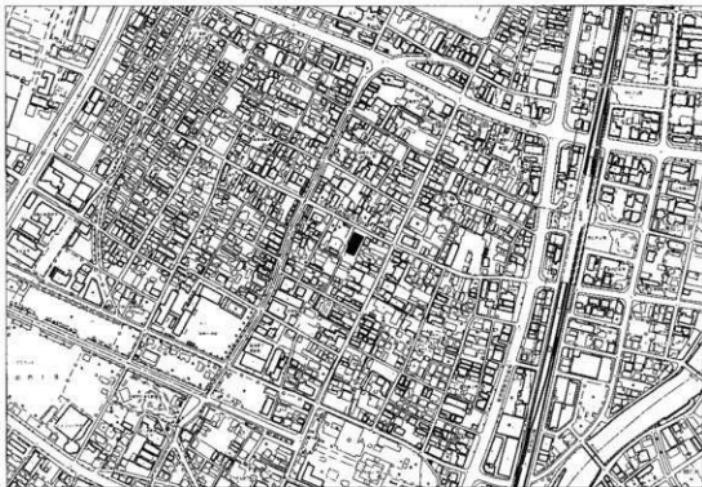
箱崎遺跡の中心には、筥崎宮が位置する。箱崎遺跡の消長を語る上で、中心となる区域である。「筥崎宮縁起」によると、筥崎宮は延長元年（923）に大分宮（福岡県飯塚市）より遷座したとされる。对外交易に意欲的な大宰府官人の思惑が背景にあったとされる。筥崎宮の名は『延喜式』神名帳〔延長5年（927）成立〕には八幡大菩薩筥崎宮一座 名神大と見える。尊名から遷座の初めより神仏習合の形態をとっていたことが察せられる。筥崎宮創建から平安時代中期にかけての遺構は筥崎宮南東部の南北300m、東西100mの範囲に集中し、出土遺物からは官衙もしくは官人居住域といった性格



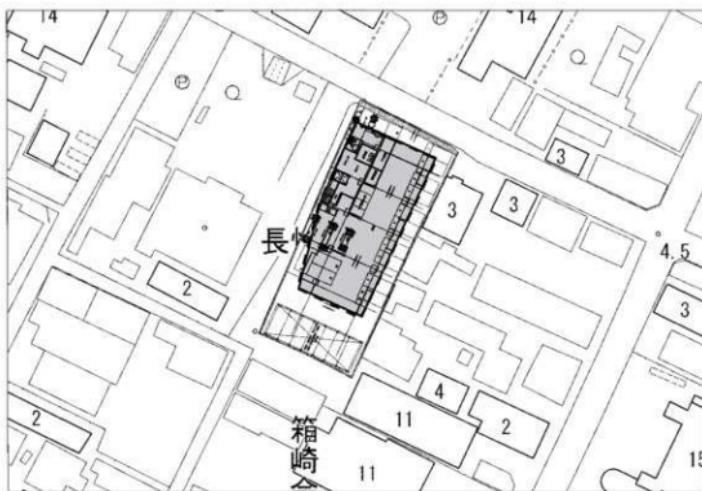
第1図 箱崎遺跡と周辺の遺跡（縮尺 1/25000）

を見て取れる。平安時代後期には、博多・箱崎に宋商人が居留し活発に日宋貿易が展開されるようになる。遺構は前段階より倍以上に拡がる。箱崎遺跡は筥崎宮を中心として、権門社寺と密接な関係をもち、対外交易の一大拠点博多を補完する立場にあったが、平安時代末から鎌倉時代にかけてダンケルク海進による海面上昇により博多遺跡群が位置する砂丘が狭隘になったことも一因として考えられる。筥崎宮は対外交易を営んでいた宋人を神人、武装した下級神職として抱え、貿易の利権をめぐつて大宰府や大山寺と対立し、保延6年（1140）に大山寺・香椎宮・筥崎宮等の僧徒・神人等、大宰府以下の屋舎數十家を焼く。仁平元年（1151）の大宰府官人による大追捕の結果、大宰府支配が強化される。そのような背景の下、12世紀後半以降に中国陶磁器の出土量が増加する。大宰府の支配下、石清水八幡宮との人の動きが減ったためか、12世紀前半によくみられた畿内産樟葉型瓦器は鎌倉後期までほとんどみられなくなる。治承・寿永の内乱（源平合戦 1180～1189）後、石清水八幡宮別宮となり、田中家による支配が戦国時代まで続く。鎌倉時代後半から南北朝時代にかけて出土が再び増加する楠葉型瓦器は、12世紀前半の楠葉型瓦器と同様に人の動きを示す足跡と捉えられるが、当該期の楠葉型瓦器は小型の輪花椀・ミニチュアの銅付三足羽釜と非日常的な器種となっている。文永11年（1274）・弘安4年（1281）の蒙古襲来に際して石築地の築造の記事があるが、後世に多大な破壊を受け、遺跡北端の旧九州大学構内数ヶ所の調査地で基底部が確認された他、遺跡の海側に想定されている石築地は確認されていない。箱崎地区では、薩摩國御家人が石築地役、異国警固番役に割り当てられている。一方で、本調査地を含む砂丘の北西側南北300m、東西100mの範囲では13世紀後半の焼土層が確認され、二次被熱した陶磁器が多く出土している。文永の役における元軍の兵火による可能性がある。寺社造営料唐船「新安沈船」は、1323年に慶元（寧波）から日本へ向け出帆、韓国新安沖で沈没し、膨大な遺物が引き上げられた。

その中に筥崎宮勸進僧教仙の名が記された木簡が複数発見されている。箱崎遺跡では希少な南宋後半～元の龍泉窯青磁の優品が高頻度で出土している。箱崎出土の龍泉窯青磁の造りをみると、高台疊



第2図 箱崎遺跡発掘区域図（縮尺 1/8000）



第3図 箱崎遺跡第96次調査発掘地（縮尺 1/1000）

付が細く削り出されているものが多い。それらは新安沈船より前段階の13世紀後半のもので、寺社造営料唐船以前にも貿易船へ数次にわたる間わりにより、什器としての陶磁器を入手する際に有利な状況にあった。

◇参考文献 川添昭二 1970 「筥崎の大舟 - 府官研究の一節」『福岡地方史談話会会報』第100号／広渡正利 1999『筥崎官史』文献出版／川添昭二監修 重松敏彦編 2007『大宰府古代史年表』吉川弘文館／角川日本地名大辞典 40 福岡県

### III 調査の記録

#### 1 調査の概要

調査区の長軸は周辺の地割と同じく真北から約21°東に振れている。調査に先行して調査対象の遺構面までの表土は重機により鋤取り、土砂はダンプトラックで外部に搬出し、以降人力による掘下げで生じた残土は調査区内で処理することとした。調査区を長軸で二分、北東側をⅠ区（A-1・2区）、南西側をⅡ区（B-1・2区）とし、二分した調査区と残土置き場を工程の半ば程で残土置き場として限界に達した時点で、重機で切り返して調査することとした。以下、調査日誌抄から6月3～5日 表土鋤取り 5日 機材搬入、遺構確認 19～20日 掘乱・井戸の掘下げ 20～25日 A-1区Ⅰ層、掘乱掘下げ 24・25日 SE06・07 井戸掘下げ 7月1～5日 A-1・2区遺構（井戸・柱穴・溝）掘下げ 8日 A-1・2区全景写真撮影 9～12日 SE03・06・07・15～17 井戸掘下げ 12日 SE03・06・07 井戸・SK11・12 井戸清掃・個別写真撮影 7～19日 SE16・30 井戸掘下げ 23日 SE03・06・07 井戸・A-1区ピット・溝掘下げ 24日 SE03・06 井戸枠・SE02 井戸掘下げ 25日 A-2区遺構（SE01・02 井戸・SK09 土坑、ピット状遺構）掘下げ 26日 SE01・A-2区ピット掘下げ 29・30日 重機による打って返し A-2区 SE01・32 井戸掘下げ 8月1～8日 B-1区遺構掘下げ 9～20日 B-2区遺構掘下げ 22日 SE02 井戸・04 土坑掘下げ 23日 B-1・2区全景写真撮影 26日 B-2区土坑（SK59）井戸（SE02・48）29日 B-2区遺構（SK55・K-08他）掘下げ 20日以降の多雨により1週間延長に30日～9月3日 SE02・48・55 井戸・K-02 掘下げ 4日 B-1区遺構（K-08・SX34他）掘下げ 5・6日 B-1区遺構（SE42 井戸他ピット）掘下げ、台風養生 9日 B-1区遺構（SE42・64他ピット）掘下げ 10～18日 B-1区遺構掘下げ 20日 借上機材返却、機材撤収。

#### 2 遺構と遺物

##### 検出遺構

###### 掘立柱建物（第5図）

**SB01** 調査区南西で検出した梁間2間、桁行3間の東西棟である。梁間の全長3.1m、桁行の全長5.0mを測る。柱穴は円形で、径25～35cm、深さ25cm前後を測る。北側の西から1・2個目の柱穴がSE01に切られ、東側の北から1・2個目の柱穴が搅乱を受けている。方位はN-25°-Eに取る。

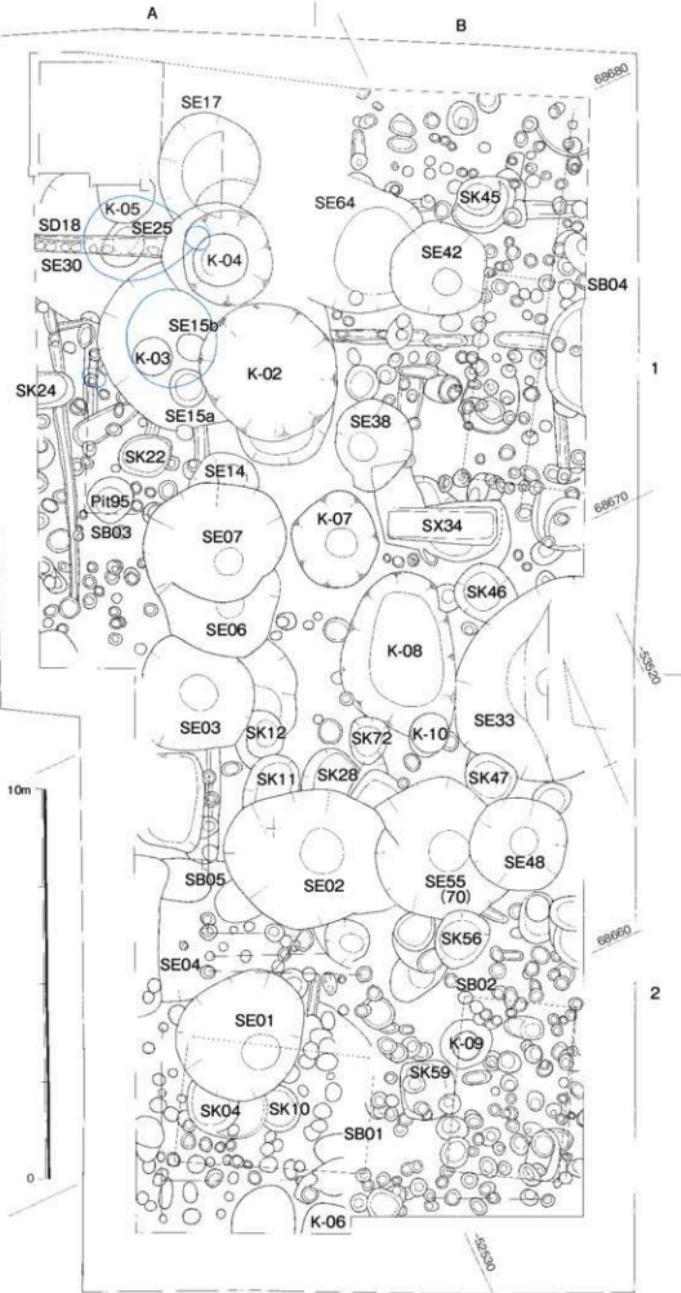
**SB02** 調査区南東で検出した梁間2間、桁行3間の南北棟である。梁間の全長3.0m、桁行の全長4.6mを測る。柱穴は円形で、径25～35cm、深さ10～35cmを測る。西側の北から2個目の柱穴がK-09に切られる。方位はN-25°-Eに取る。

**SB03** 調査区北西で検出した梁間2間、桁行3間の推定南北棟である。想定される東側と北側の柱穴がSE07・15、SK14に切られ、桁行の全長5.0m、南側の棟持柱から折り返した梁間の推定延長3.8mを測る。柱穴は円形で、径30～40cm、深さ30～40cm前後を測る。方位はN-25°-Eに取る。

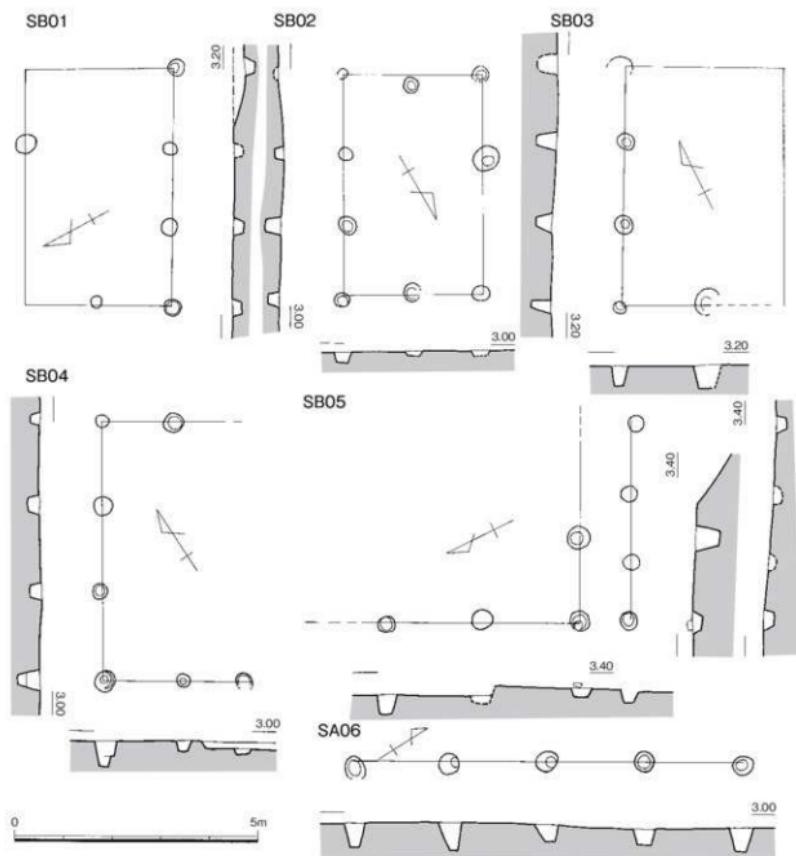
**SB04** 調査区北東で検出した梁間2間、桁行3間の推定南北棟である。東側の柱穴の内、南端1個を除く他の柱穴が調査区外に想定される。梁間の全長3.0m、桁行の全長5.3mを測る。柱穴は円形で、径30～40cm、深さ30～40cm前後を測る。方位はN-25°-Eに取る。

**SB05** 調査区南西で検出した建物の南西角の断片である。北側と東側がSE02・03に切られ、建物の全体規模は不明である。柱穴は円形で、径40～50cm、深さ40～60cmを測る。建物の南西に1.0mの距離を取って、一回り小さい径30～40cm柱穴が並び、庇とみられる。方位はN-25°-Eに取る。

**SA06** 調査区北東端で検出した南北に延びる柱列4間分で、調査区外に建物として展開する可能性もある。柱穴は円形で、径45cm前後、深さ35～50cmを測り、柱間の間隔は2.0mの等間隔を取る。方位はN-30°-Eに取る。



第4図 箱崎遺跡第96次調査遺構配置図（縮尺1/125）



第5図 掘立柱建物実測図（縮尺1/100）

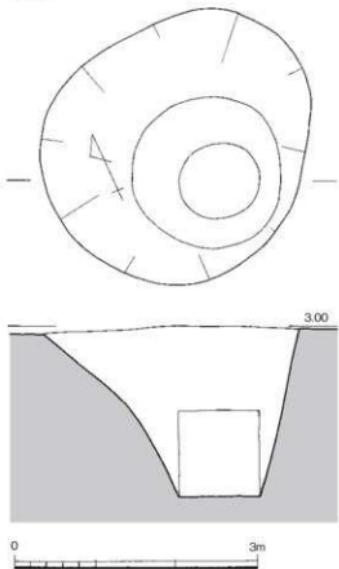
#### 井戸（第6・7図）

**SE01** 調査区南西で検出した。掘り方の平面形は径3.2~3.5mの不整円形を呈し、深さ2.1mを測る。基底部に径1.0m、深さ1.1mの桶側の痕跡がみられた。底面の標高0.9mを測る。SK09・10を切る。

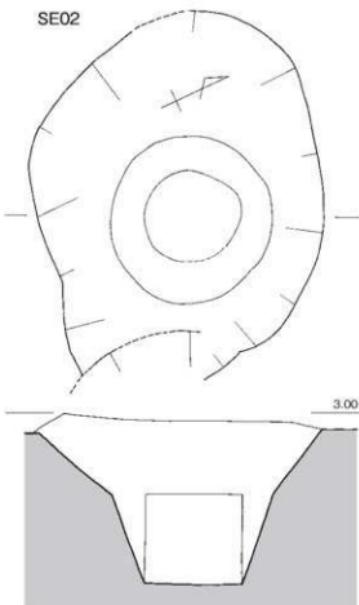
**SE02** 調査区南西で検出した。掘り方の平面形は径3.5~4.2mの不整円形を呈し、深さ2.1mを測る。基底部に径1.2m、深さ1.1mの桶側の痕跡がみられた。底面の標高0.9mを測る。SK08・11・28・71を切る。

**SE03** 調査区中央西で検出した。掘り方の平面形は径3.0~3.2mの不整円形を呈し、深さ2.3mを測る。基底部に径0.95m、深さ1.3mの桶側の痕跡がみられた。底面の標高0.7mを測る。SE06に切られる。

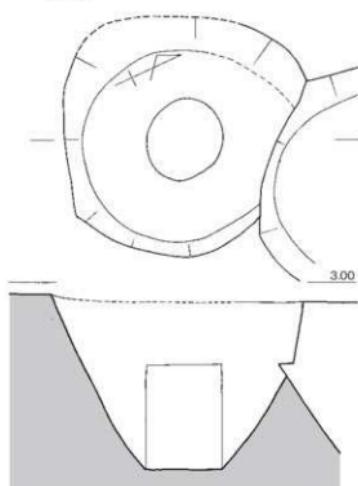
SE01



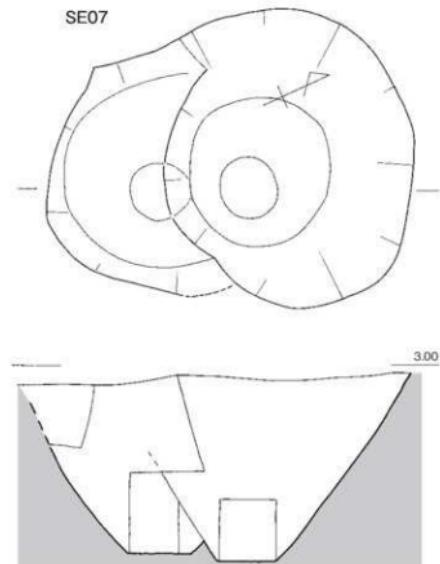
SE02



SE03



SE07



第6図 井戸実測図1（縮尺 1/60）

**SE06** 調査区中央西で検出した。SE07に切られ、南半分が残る。復元される掘り方の平面形は径3.1mの不整円形を呈し、深さ2.2mを測る。基底部に径0.75m、深さ1.0mの桶側の痕跡がみられた。底面の標高0.6mを測る。

**SE07** 調査区中央西で検出した。掘り方の平面形は径3.2～3.7mの不整円形を呈し、深さ2.2mを測る。基底部に径0.7m、深さ0.75mの桶側の痕跡がみられた。底面の標高0.6mを測る。SE06を切る。

**SE15** 調査区北西で検出した。東側が搅乱を受け、残存する掘り方の復元径4.4mを測る。1.6m掘下げたところで、2基切り合っていることが判明した。南側の桶側aの痕跡が径0.7m、深さ0.5m、底面の標高0.7m、北側の桶側bの痕跡が径0.7m、深さ0.45m、底面の標高0.75mを測る。

**SE31** 調査区北西、上面遺構SD18下面で確認した。掘り方の平面形は径2.2mの円形を呈し、深さ0.3mを測る。基底部に径0.7m、深さ0.3mの桶側の痕跡がみられた。底面の標高0.7mを測る。

**SE38** 調査区中央北で検出した。掘り方の平面形は2.1m前後の不整円形を呈し、深さ1.8mを測る。基底部に径0.7m、深さ0.25mの桶側の痕跡がみられた。底面の標高0.9mを測る。

**SE42** 調査区北東で検出した。掘り方の平面形は径2.5～2.6mの不整円形を呈し、深さ1.8mを測る。基底部の南側に径0.7m、深さ0.1mの桶側の痕跡がみられた。底面の標高1.0mを測る。

**SE48** 調査区南東で検出した。掘り方の平面形は径2.4～2.5mの不整円形を呈し、深さ1.9mを測る。基底部に径0.75m、深さ0.4mの桶側痕がみられた。底面の標高0.9mを測る。SE55・SK62を切る。

**SE55** 調査区南東で検出した。掘り方の平面形は径3.5～3.7mの不整円形を呈し、深さ1.7mを測る。基底部中央に径1.0m、深さ0.4mの桶側の痕跡がみられた。底面の標高0.9mを測る。

#### 土坑（第8～10図）

**SK09** 調査区南西で検出した。北東がSE01に切られ、全貌は不明である。残存長2.1m、残存幅1.0m、深さ0.6mを測る。

**SK10** 調査区南西で検出した。北西がSE01に切られ、径1.2mの円形を呈し、深さ0.2mを測る。土師器小皿・杯が底面から0.1m浮いた状態で出土した。

**SK11** 調査区中央南で検出した。南東がSE02に切られ、北側はSK12を切る。不整梢円形を呈し、残存長1.5m、幅1.4m、深さ0.55mを測る。土師器小皿・杯が底面から0.4m浮いた状態で出土した。

**SK12** 調査区中央南で検出した。北西がSE03、南側がSK11に切られ、全貌は不明である。残存長1.3m、幅1.2m、深さ0.5mを測る。青磁小碗・土師器小皿が底面から0.5m浮いた状態で出土した。

**SK14** 調査区北西で検出した。南西がSE07に切られ、SD13を切る。残存長1.8m、残存幅0.8mの不整円形を呈し、深さ0.65mを測る。土師器小皿・杯が底面から0.6m浮いた状態で出土した。

**SK22** 調査区北西で検出した。北東が調査区外にかかる。全長1.4m、検出幅1.1m、深さ0.25mの不整形を呈する。SD20を切る。

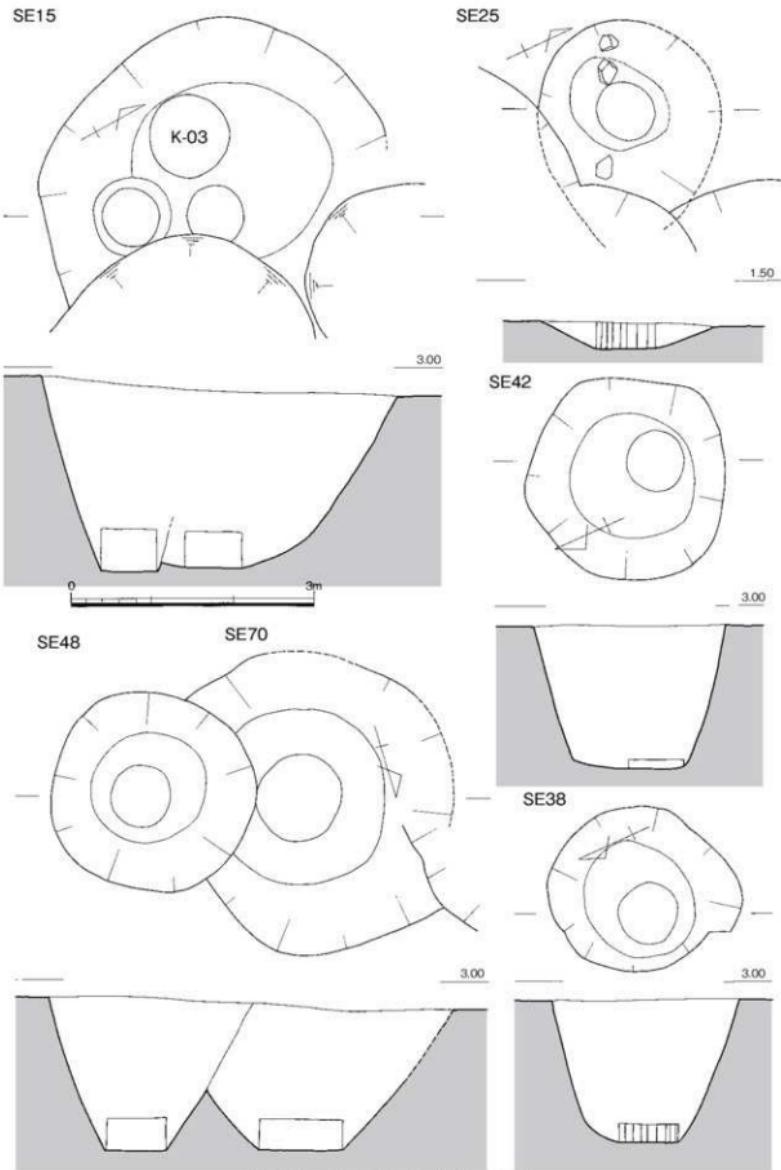
**SK24** 調査区北西端で検出した。SD20を切る。検出長1.0m、幅0.95m、深さ0.3mを測る。

**SK28** 調査区中央南で検出した。南側がSE02に切られ、全貌は不明である。残存長1.1m、残存幅1.4m、深さ0.2mを測る。土師器小皿が底面から0.1m浮いた状態で出土した。

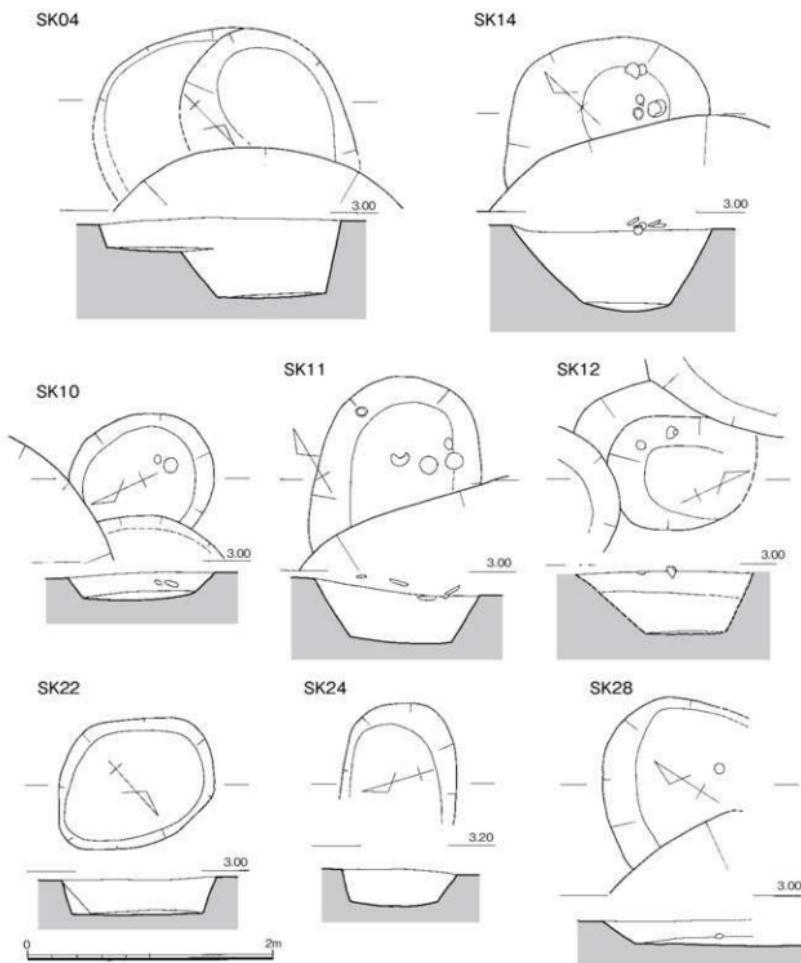
**SK45** 調査区北東で検出した。1.6×1.4mの不整隅丸方形を呈し、深さ0.3mを測る。底面の北側に、径1.0m、深さ0.2mの掘り込みがみられた。

**SK46** 調査区中央西で検出した。SE33に切られる。径1.4mの不整円形を呈し、深さ0.5mを測る。

**SK47** 調査区中央西で検出した。北東がSE33、南西がSE55に切られる。全長1.35m、残存幅1.15mの不整円形を呈し、深さ0.85mを測る。主軸の方位はN-30°Wに取る。土師器小皿・杯が底面から0.8m浮いた状態で出土した。



第7図 井戸実測図2(縮尺1/60)

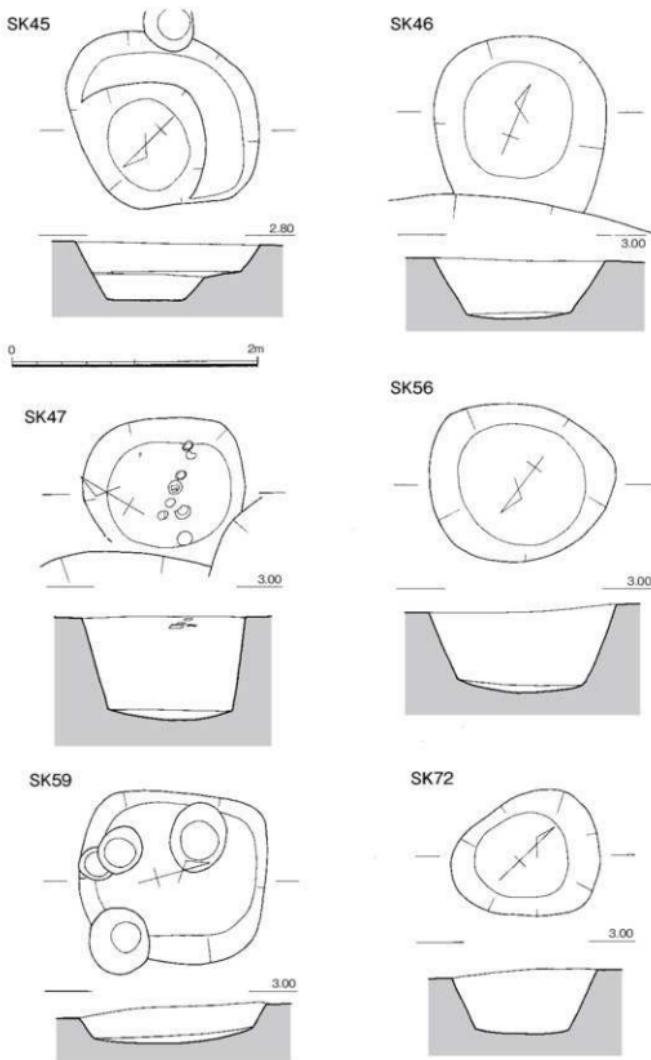


第8図 土坑実測図1（縮尺1/40）

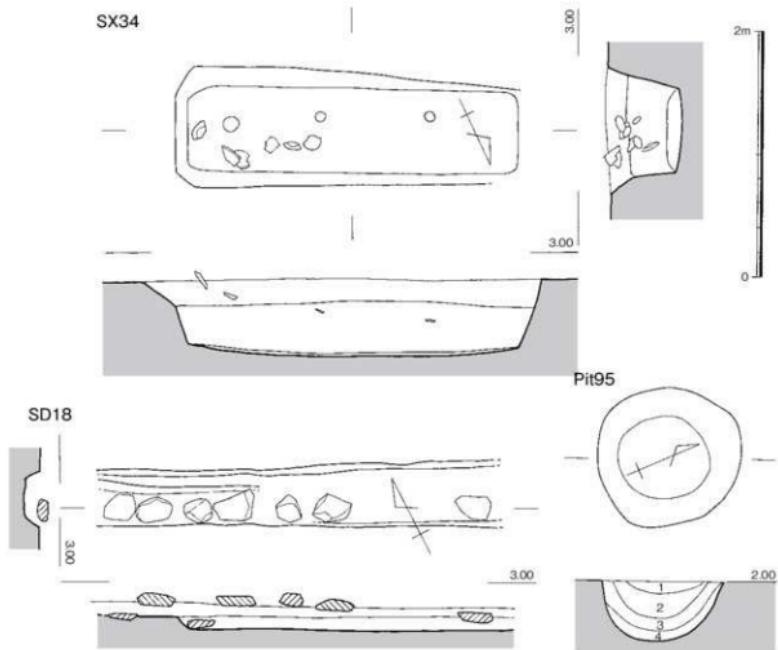
**SK56** 調査区南東で検出した。SE55を切る。径1.35～1.5mの不整円形を呈し、深さ0.65mを測る。

**SK59** 調査区南東で検出した。北東が調査区外にかかる。全長1.55m、幅1.1m、深さ0.35mの隅丸方形を呈する。方位はN-25°-Eに取る。

**SK72** 調査区中央南で検出した。全長1.2m、検出幅1.0m、深さ0.5mの不整梢円形を呈する。



第9図 土坑実測図2 (縮尺 1/40)



第10図 土坑実測図3(縮尺1/40)

#### 土壤墓(第10図)

**SX34** 調査区中央北東で検出した。木質の痕跡や鉄釘が確認されなかったが、組み合わせ式の木棺を埋置した可能性もある。南西がSK73に切られ、北側が搅乱を受けているが、掘り方は全長2.9m、幅1.0mの方型を呈し、深さは0.6mを測る。主軸の方位はN-25°Eに取る。土師器小皿・杯・鍋が底面から0.2~0.5m浮いた状態で出土した。

#### 溝(第10図)

**SD18** 調査区北西で検出した。幅0.45~0.55m、深さ0.25mの東西溝で、SE38上面で検出した。北東はSE15/17-K-04/05に切られ、北西は調査区外に延び、延長3.4m検出した。方位はN-25°Eに取る。遺構検出面付近で径0.2~0.35m、厚さ0.05~0.1mの板石を並置した状態で検出された。一部溝の底面付近で検出された板石もある。これらは溝の木蓋上に風で飛ばないように置かれたもので、底面近くで検出された板石は溝が埋没する前に木蓋が腐朽し溝に崩落したものと考えられる。

**SD20** 調査区北西で検出した幅0.25~0.35m、深さ0.3mの南北溝、SK24に切られ、両端は調査区外に延び、延長9m検出した。北側はやや西に蛇行する。直線に延びる南側の方位はN-25°Eに取る。

#### ピット状遺構(第10図)

**Pit95** 調査区中央西で検出した。径1.1~1.2mの円形を呈し、深さ0.6mを測る。4層に分層され、1. 黒褐色(2.5Y3/1)砂質土、2. 黄灰色(2.5Y6/1)砂質土、3. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土、4. 黄灰色(2.5Y6/1)砂質土で、4層は炭化物を含む。

## 出土遺物

### SE01 出土遺物（第 11 図）

土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（1～4）1～3 は口径 8.0～8.9cm・器高 1.1～1.4cm を測り、4 は法量が他の一群と比べ大きく、口径 9.8cm・器高 1.6cm を測る。杯（5）口径 12.2cm・器高 2.8cm を測る。瓦器 小皿（6）底部は糸切り離し、体部外面から内底にかけてヘラ磨き、外底に板状圧痕が残る。瓦質土器 こね鉢（7）体部下半以下が残存する。外面はハケ目の上に指頭圧痕、内面はハケ目が残り、内底は使用により磨滅、外底には板状圧痕が残る。井戸枠内からの出土である。

### SE02 出土遺物（第 11 図）

土師器 小皿（8～12）底部は糸切り離し、8・12 の体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。9～11 は体部外面から内底まで横ナデ。口径 7.8～8.6cm・器高 1.3～1.6cm を測る。杯（13）口径 12.2cm・器高 2.8cm を測る。底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。瓦質土器 こね鉢（14）端部が上方に突出する口縁部片で、内外面とも器表の荒れが著しく、外面の一部にハケ目が残る。須恵器 こね鉢（15）端部が上方に突出し「く」字状をなす口縁部片で、胎土には粗い砂粒を多量に含み、明紫灰色を呈する。青磁 香炉（16）口縁部は内側に向か水平に屈曲する。外面に八卦文を割り出す。灰白色の胎土に、オリーブ灰色の釉が厚く掛かる。陶器小壺（17）砂粒を多量に含み、にぶい橙色の胎土に、灰オリーブ色釉が掛かる。

### SE03 出土遺物（第 11 図）

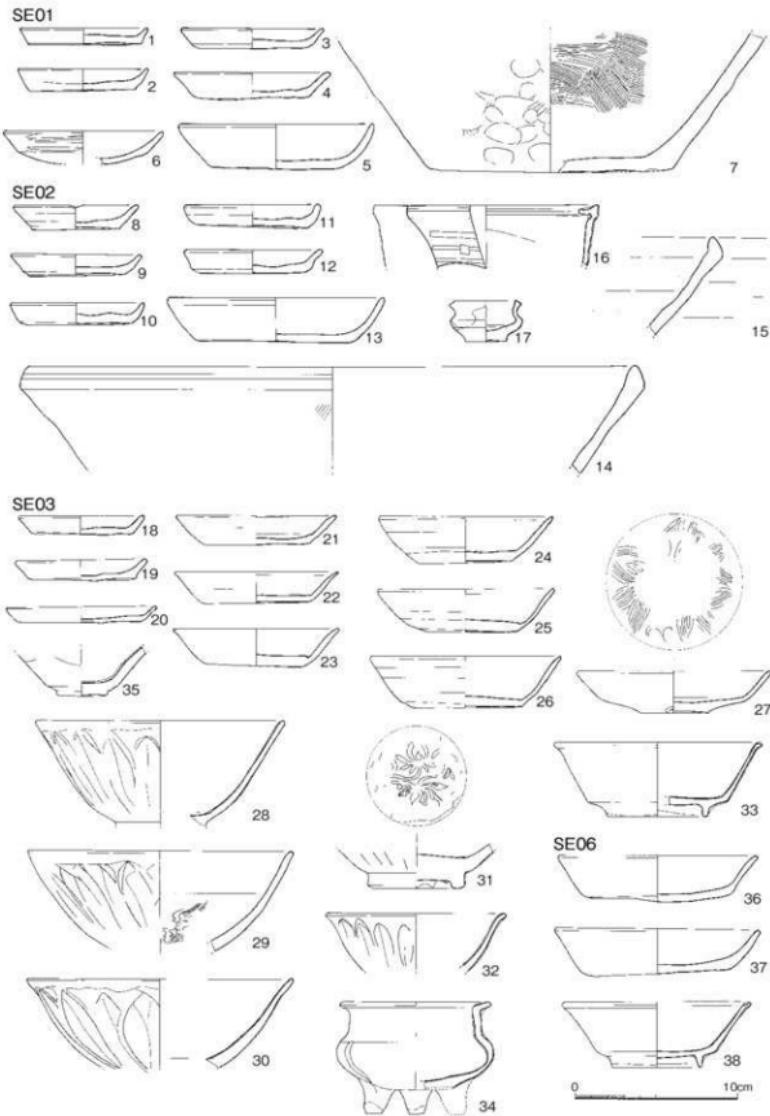
土師器 小皿（18～20）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 7.8～9.4cm・器高 1.0～1.4cm を測る。白磁 皿（21～27）21～26 は口禿の皿で、21～23 は全面施釉の後、口縁端部の釉をかき取るIX-1-a で、口径 10.0～10.4cm・器高 1.9～2.4cm を測る。24・25 は体部外面下位から底部にかけて露胎のIX-2 で、口径 10.8・11.0cm・器高 2.9・2.8cm を測る。26 は口径 11.9cm・器高 3.3cm を測るIX-1-a である。27 はVII-2 で、体部中位で屈曲し、直線的に延びる。内底見込みは平坦で、蓮華、葉文を印花で施す。青磁 龍泉窯系である。碗（28～31）体部外面に鶴蓮弁を削り出す。28～30 は底部が欠失している。29 の内面には櫛状工具により雲状の文様が施される。31 は底部片で、内底見込みに印花で蓮華折枝文を施す。小碗（32）体部外面に鶴蓮弁を削り出す。底部を欠失する。杯（33）外面とも無文のIII-1 で、体部は下位で屈曲し、直線的に延びる。口縁部は鋭く短く引き出し、端部を摘まみ上げる。高台は細く削り出され、疊付けは幅が狭く露胎となす。香炉（34）三足の脚が付く扇形の香炉である。扁平な胴部から頸部が直立して伸び、口縁部は水平に屈曲する。鋭く後をなす肩から脚にかけて垂直に凸線が入る。脚の先端は釉を剥ぎ取っている。胎土は灰白色を呈し、オリーブ灰色の釉が厚く掛かる。黒釉陶器 碗（35）口縁部を欠失する。内底見込みが平坦で、高台の削り出しは浅い。

### SE06 出土遺物（第 11 図）

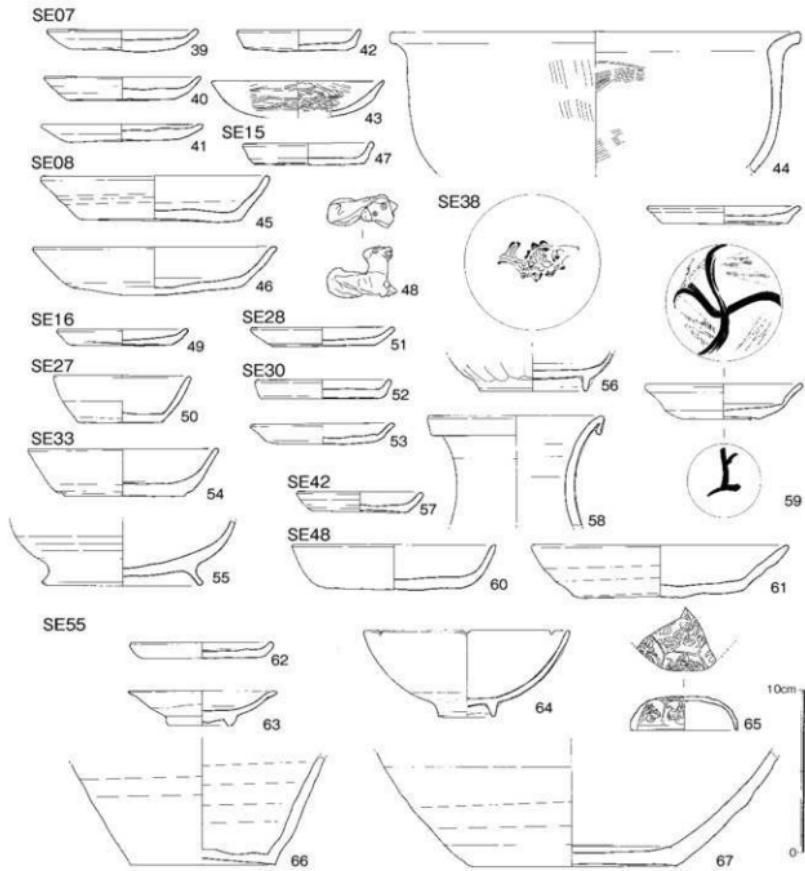
土師器 杯（36・37）底部は糸切り離し、36 は体部外面から内底まで横ナデ。口径 12.4cm・器高 2.9cm、37 の体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 12.8cm・器高 2.8cm を測る。青磁 杯（38）内外面とも無文の龍泉窯系腰折杯III-1a で、底部と体部の境で屈曲し、明瞭に稜がつく。体部は直線的に外上方への、口縁端部は外に摘まみ出され、上面は平坦となす。底部の内側に高台を削り出す。

### SE07 出土遺物（第 12 図）

土師器 小皿（39～42）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。39～41 は口径 9.5～10.1cm・器高 1.1～1.4cm を測る。42 は法量が他の一群と比べ小さく、口



第 11 図 井戸出土遺物実測図 1 (縮尺 1/3)

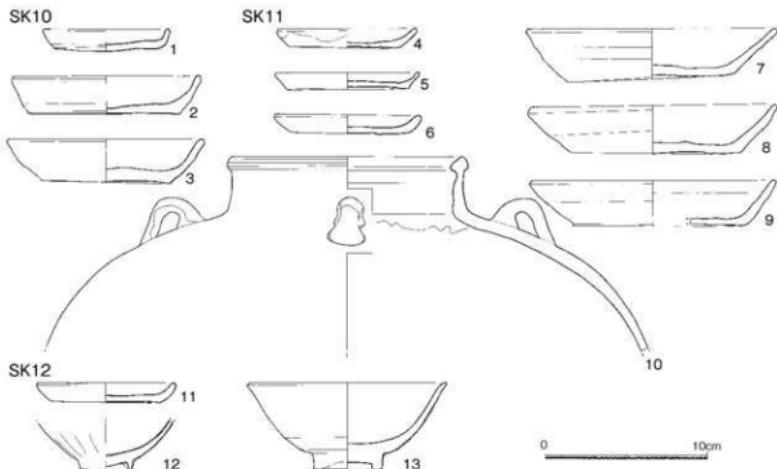


第12図 井戸出土遺物実測図2（縮尺1/3）

径7.7cm・器高1.3cmを測る。井戸枠内出土で、後出するものである。瓦器 小皿(43)底部は糸切り離し、体部外面から内底にかけてヘラ磨き、外底に板状圧痕が残る。土師質土器 鍋(44)口縁部は「く」の字に外反し、体部上半は直立、下半は内湾気味に丸みを持つ。底部を欠失する。口縁部は横ナデ、体部外面は粗いハケ目、内面上半は横ハケ目、下半はヘラナデを施す。

#### SE08出土遺物（第12図）

土師器 杯(45・46)底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径14.3・16.2cm・器高2.8・3.0cmを測る。



第13図 土坑出土遺物実測図1（縮尺1/3）

#### SE15 出土遺物（第12図）

土師器 小皿（47）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 8.2cm・器高 1.4cm を測る。陶器 犬（48）伏せの姿勢を取る。胎土は灰白を呈し、頭部から背中にかけてオリーブ黄色の釉が掛かる。

#### SE16 出土遺物（第12図）

土師器 小皿（49）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 8.2cm・器高 1.0cm を測る。

#### SE27 出土遺物（第12図）

白磁皿（50）体部外面下位より下が露胎のIX-2で、口径 8.6cm・器高 3.1cm を測る。

#### SE28 出土遺物（第12図）

土師器 小皿（51）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 9.0cm・器高 1.1cm を測る。

#### SE30 出土遺物（第12図）

土師器 小皿（52・53）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 8.5・9.0cm・器高 1.1・1.2cm を測る。

#### SE33 出土遺物（第12図）

土師器 杯（54）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 11.9cm・器高 3.0cm を測る。内黒土器 梵（55）口縁部は欠失している。

#### SE38 出土遺物（第12図）

青磁杯（56）体部外面には蓮弁を削り出す龍泉窯系III-4で、口縁部から体部上半かけて欠失する。体部は内湾気味に延び、内底見込みに印花による魚文を施す。

#### SE42 出土遺物（第 12 図）

土師器 小皿（57）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 9.6cm・器高 1.1cm を測る。白磁 水注（58）鋭く屈折する口縁部から頸部にかけての破片資料である。青磁 皿（59）同安窯系 I -1 で、内底にヘラによる簡略化した花文と櫛状工具による「之」字形点綴文を入れる。露胎の外底には墨書「上」が記される。

#### SE48 出土遺物（第 12 図）

土師器 杯（60・61）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 12.7・16.0cm・器高 2.8・3.2cm を測る。

#### SE55 出土遺物（第 12 図）

土師器 小皿（62）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 9.0cm・器高 1.0cm を測る。白磁 皿（63）見込みの釉を輪剥ぎする高台付皿皿類である。青磁 小碗（64）龍泉窯系の体部内外面とも無文の碗III -1 と相似形の小ぶりな碗で、体部から口縁部までゆるやかに内湾し立ち上がる。口縁部に輪花を刻む。胎土が灰白色を呈し、灰オーリーブ色の釉が高台先端を除き全面にかけられる。青白磁 合子蓋（65）外面に型作りによる花文を施し、内面は天井部を除き端部まで露胎である。陶器 壺（66）残存する体部下半以下の範囲は無釉で、胎土には粗い砂粒を多量に含み、明緑灰色を呈する。陶器 こね鉢（67）無釉焼き締めのこね鉢 I 類で、口縁部は欠失している。内面は使用による磨減、体部外面は横ナデを施す。胎土には粗い砂粒を多量に含み、橙色を呈する。

#### SK10 出土遺物（第 13 図）

土師器 底部は糸切り離しによる。小皿（1）体部外面から内底まで横ナデ。口径 7.9cm・器高 1.4cm を測る。杯（2・3）2 は体部外面から内底まで横ナデ、口径 11.8cm・器高 2.4cm を測る。3 は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 12.3cm・器高 2.9cm を測る。

#### SK11 出土遺物（第 13 図）

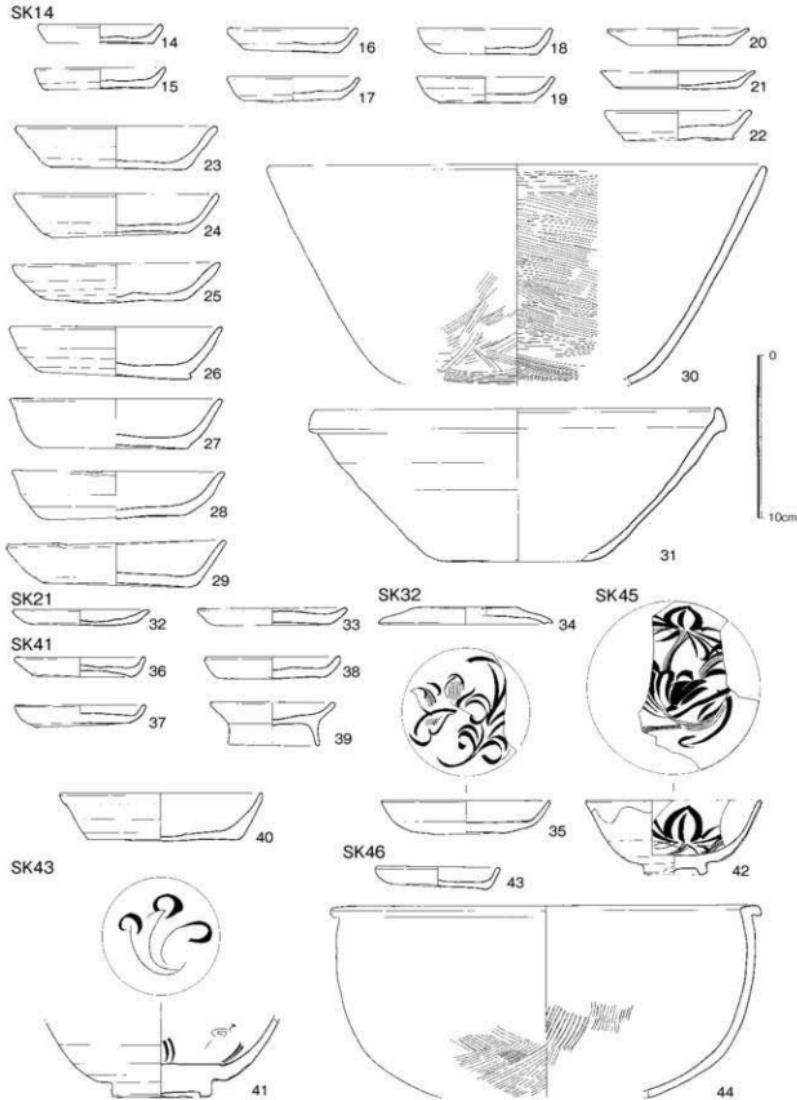
土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（4～6）口径 8.7～9.2cm・器高 1.1～1.2cm を測る。杯（7～9）口径 15.3～15.7cm・器高 2.8～3.2cm を測る。陶器 四耳壺（10）頸部が直立して延び、口縁部は肥厚し断面四角形を呈し、端部は内傾する。肩部に縱長の四耳を貼り付ける。体部中位以下は欠失している。細かい砂粒を多量に含む橙色の胎土に、にぶい黄褐色の釉が体部外面から頸部内面まで掛けられている。

#### SK12 出土遺物（第 13 図）

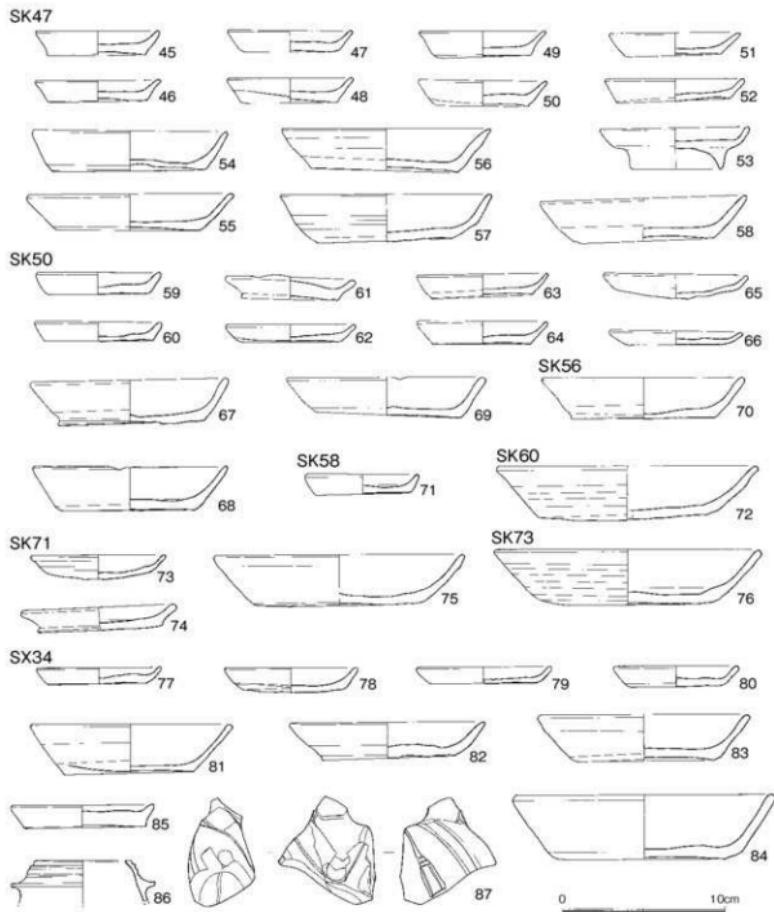
土師器 小皿（11）底部は糸切り離し、体部外面から内底まで横ナデ。口径 8.7cm・器高 1.2cm を測る。青磁 碗（12・13）いずれも龍泉窯系で、12 はIII -2 類で、口縁部が欠失している。厚く施釉され、断面三角形（細めの台形）の高台先端の釉をカキ取り露胎とし、鷺蓮弁文や高台の削りが鋭い。13 は無文の碗で、腰が張らず、蓮弁文碗と同じ外形である。

#### SK14 出土遺物（第 14 図）

土師器 底部は糸切り離しによる。小皿（14～22）14・16～19 は体部外面から内底まで横ナデ、口径 7.8～8.6cm・器高 1.2～1.6cm を測る。15・20～22 は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。15 は口径 8.2cm・器高 1.3cm を測る。20・21 は造構上面からの出土で、15 は口径 8.9・9.7cm・器高 1.1cm を測り、他の一群より口径が大きく、器高が低い。22 は口径 9.2cm・器高 1.9cm と、器高が高く、厚底である。杯（23～29）口径 12.6～13.7cm・器高 2.4～3.1cm を測る。23・24・25・27・28 は体部外面から内底まで横ナデ、26・29 は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。



第14図 土坑出土遺物実測図2 (縮尺1/3)

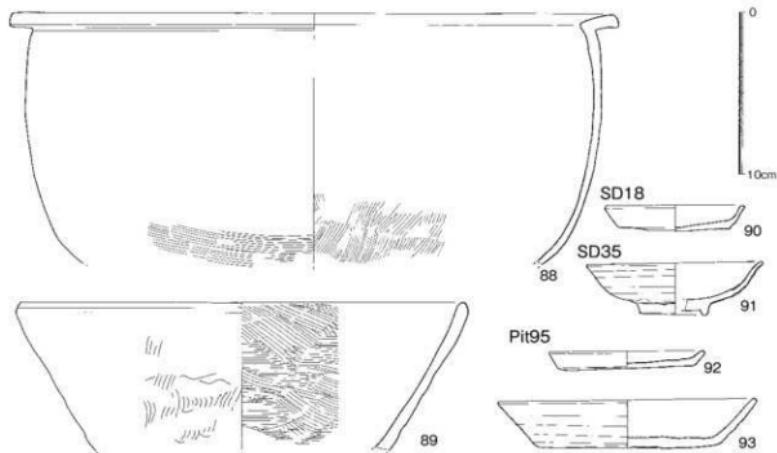


第15図 土坑出土遺物実測図3・土壙墓出土遺物実測図1(縮尺1/3)

**土師質土器 瓢（30）** 体部が口縁部まで直線的に延び、底部との境は不明瞭である。底部のほとんどは欠失している。外面は口縁部から体部上半にかけて横ナデ、体部下半は粗いハケ目、内面は横ハケ目を施す。**須恵器 こね鉢（31）** 体部は直線的に延び、口縁部は端部が上下に突出しT字状をなす。胎土には粗い砂粒を多量に含み、明褐灰色を呈する。

#### SK21出土遺物（第14図）

**土師器 小皿（32・33）** 底部糸切り、32は体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕。口径8.6cm・器高1.1cm。33は体部外面から内底まで横ナデ、口径9.4cm・器高1.0cmを測る。



第16図 土壌基出土遺物実測図2・溝・Pit出土遺物（縮尺1/3）

#### SK32出土遺物（第14図）

土師器 蓋（34）天井部外面を平坦にし、口縁端は直線的に延び、内面に凹線をめぐらす。天井部外面はヘラ削り、体部は回転横ナデ、天井部内面はナデを施す。口径 10.8cm・器高 1.1cm を測る。白磁皿（35）VIII-1 で、体部中位で緩く屈曲し、直線的に延びる。内底見込みは平坦で、ヘラと櫛状工具を用いて花卉文を施す。

#### SK41出土遺物（第14図）

土師器 小皿（36～38）底部糸切り離し、体部外面から内底まで横ナデ、口径 8.2～8.5cm・器高 1.2～1.3cm を測る。高台付小皿（39）体部外面から内底、高台外面は横ナデ、口径 7.8cm・器高 2.7cm を測る。杯（40）底部糸切、内底まで横ナデ、口径 12.7cm・器高 3.0cm を測る。

#### SK43出土遺物（第14図）

青磁 小碗（41）体部外面は無文、内面に片彫りで蓮華花文と葉文を入れる。龍泉窯系無文劃花文碗 I-1 を小型化したもので外形は相似形をなすが、見込みに圓線は入らない。

#### SK45出土遺物（第14図）

青磁 碗（42）器全体を五弁花に見立てた I-4 類で、口縁部を欠失する。

#### SK46出土遺物（第14図）

土師器 小皿（43）底部は糸切り離し、体部外面から内底まで横ナデ、口径 7.8cm・器高 1.2cm を測る。土師質土器 鍋（44）口縁部が短く水平に開き、体部は緩やかに内湾し立ち上がる。口縁部は横ナデ、体部外面上半ナデ、下半粗いハケ目、内面上半横ナデ、下半ハケ目。

#### SK47出土遺物（第15図）

土師器 底部は糸切り離しによる。小皿（45～52）体部外面から内底まで横ナデ、口径 7.7～8.7cm・器高 1.3～1.6cm を測る。高台付小皿（53）・杯（54～58）体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。54～58 は口径 12.2～13.1cm・器高 2.3～2.9cm を測る。

#### SK50 出土遺物（第 15 図）

土師器 底部の切り離しは 65 がヘラ、他は糸による。小皿（59～66）59～64 は体部外面から内底まで横ナデ、口径 7.8～8.2cm・器高 1.1～1.5cm を測る。65 は口径 9.0cm・器高 1.6cm を測り、丸底に近い。66 は口径 8.3cm・器高 0.9cm を測り、扁平な形状を取る。杯（67～69）67 は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 12.3cm・器高 2.7cm を測る。68・69 は体部外面から内底まで横ナデ、口径 12.4・12.6cm、器高 2.4・2.6cm を測る。

#### SK56 出土遺物（第 15 図）

土師器 杯（70）糸切り離し、内底ナデ、口径 12.1cm・器高 2.7cm を測る。

#### SK58 出土遺物（第 15 図）

土師器 小皿（71）糸切り、内底まで横ナデ、口径 7.1cm・器高 1.3cm。

#### SK60 出土遺物（第 15 図）

土師器 杯（72）糸切り離し、内底ナデ、口径 16.3cm・器高 3.3cm を測る。

#### SK71 出土遺物（第 15 図）

土師器 体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（73・74）底部の切り離しは 73 がヘラ、74 は糸による。口径 8.4・9.7cm・器高 1.5・1.4cm を測る。杯（75）底部はヘラ切り離し、口径 15.6cm・器高 3.2cm を測る。

#### SK73 出土遺物（第 15 図）

土師器 杯（76）底部はヘラ切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 16.7cm・器高 3.4cm を測る。

#### SX34 出土遺物（第 15・16 図）

土師器 底部の切り離しは糸による。小皿（77～80・85）77・78 の体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 7.8・8.3cm・器高 1.0・1.4cm を測る。79・80 は体部外面から内底まで横ナデ、口径 8.5・8.8cm・器高 1.0・1.2cm を測る。85 は厚さ 1.0cm の異様に厚い底部から口縁部が短く延び、端部は細くおさめられている。口径 8.9cm・器高 1.4cm を測る。杯（81～83）81・83 は体部外面から内底まで横ナデ、口径 12.5・13.2cm・器高 3.1・2.9cm を測る。82 の体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 12.2cm・器高 2.3cm を測る。大皿（84）体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 16.3cm・器高 4.0cm を測り、杯の約 1.3 倍の寸法に相当する。瓦器 羽釜（86）楠葉型瓦器のミニチュア鉢付三足羽釜の上部破片資料である。白磁 僧形人物像（87）袈裟をまとった僧をかたどった磁器質の人物像胸部断片で、右側の襟の一部に施釉された部位がみられる。土師質土器 瓢（88）口縁部が水平に開き、体部は緩やかに内湾し立ち上がる。底部は欠失している。口縁部から体部中位にかけては内外面とも横ナデ、体部下位外面は横方向のハケ目、内面ハケ目を施す。瓦質土器 こね鉢（89）体部は直線的に延び、口縁部は端部が上方に突出する。外表面はハケ目の上に指頭圧痕が残り、内面はハケ目を施す。

#### SD18 出土遺物（第 16 図）

土師器 小皿（90）底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、口径 8.7cm・器高 1.6cm を測る。

#### SD35 出土遺物（第 16 図）

白磁 皿（91）端反り高台付皿、体部中位の屈曲部内面に沈圓線が付く。

#### Pit95 出土遺物（第 16 図）

土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（92）口径 9.3cm・器高 1.0cm を測る。杯（93）口径 16.1cm・器高 3.0cm を測る。

**Pit・包含層出土遺物（第17図）** 薄く遺物包含層が残る部位があり、グリット毎に取上げた。

**土師器 小皿（1～3）** 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。

1 (Pit384 出土) 口径 8.5cm・器高 1.0cm、2 (A-1 I 層出土) 口径 9.1cm・器高 1.2cm、3 (Pit296 出土) 口径 9.2cm・器高 1.0cm を測る。杯 (4・5・11) 底部糸切り離し、体部外面から内底まで横ナデ、4 (Pit384 出土) 口径 11.8cm・器高 2.5cm、5 (A-1 II 層出土) 口径 12.1cm・器高 2.8cm を測る。11 は口径 16.2cm・器高 3.7cm・底径 9.0cm を測り、器高が高く、口径に対する底径の比率が低い。底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はヘラナデを施す。丸底杯 (6) 底部はヘラ切り離し、体部外面は回転横ナデ、内面は平滑、外底に板状圧痕が残る。Pit140 出土、口径 15.1cm・器高 3.1cm を測る。大皿 (7) 底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕、口径 16.4cm・器高 2.9cm を測る。

**瓦器 梱（8～10）** 外底部を除き内外面ともヘラ磨きされる。8 (Pit84 出土) は底部を欠失する。9 (Pit362 出土) は体部中位の屈曲部が肥厚し、外面は稜をなす。10 (Pit151 出土) は焼成後、外底にヘラ記号を記す。

**白磁 碗（12～14）** 12 (Pit19 出土) は丸みを持った体部から口縁部が直線的に延びるV-1で、底部を欠失する。13 (Pit84 出土) は口縁端部を嘴状にし、内面に櫛状工具で施文するV-4bで、底部を欠失する。14 (Pit225) はVII類で、口縁部を欠失し、内面はヘラで施文する。皿（14・15）14 (Pit170 出土) は底部から内湾気味に立ち上がり、体部中位内面に段が付く。内底見込みが無文のVII-1'aである。15 (A-1 I 層出土) は体部中位で「く」の字状に屈曲し、その内面に段が付く。見込みに花卉文をヘラ描きするVII-2bである。

**黒釉陶器 瓢（16）** 底部を欠失する。体部の上位で屈曲し、スッポン口の口縁部が直立して延びる。Pit06 出土。

**白磁 小壺蓋（17）** A-1 I 層出土。

**白磁 皿（18）** 体部中位で屈曲し、口縁部が直線的に延びる。内底見込みに花文をヘラ描きするVII-2c である。A-1 II 層出土。

**瓦器 小皿（19）** A-2 I 層出土。

**青磁 杯（20）** 鉛縁口縁の上面が凹面をなし、端部を上につまみ出す。丸みをもつ体部内面に凹蓮弁をヘラ彫りするIII-2b である。A-2 I 層出土。

**青白磁 合子蓋（21）** 外面に型作りで花文を施す。A-2 I 層出土。

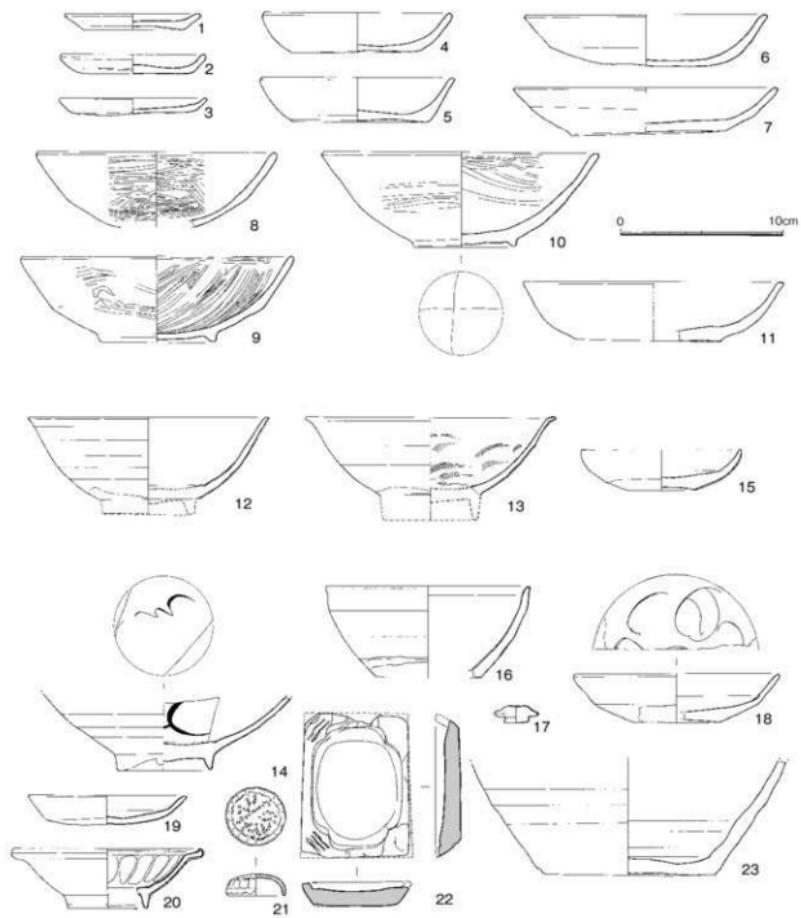
**石硯（22）** は全長 9.0cm、幅 7.0cm、高さ 1.5cm の長方形硯で、灰褐色を呈する。縁部の隅を木瓜形に削り出し、残存する周縁の隅には人字形の浅い彫り込みを三重に入れる。B-1-2 I 層出土。

**陶器 壺（23）** 底部で、Pit200 出土。

**土製品（第18図）土錐 管状土錐（1～10）** 最大径 1.0cm 前後の 1～6、1.3cm 前後の 7～10 に大別される。1 - SE01. 2 - SE04. 3 - SE06. 4 - Pit195. 5 - SK64. 6 - SE15b. 7 - SE02. 8・9 - A-1 I 層. 10 - K-07 出土である。劔錐形土錐（11～16）最大径 1.5cm 前後の 11～14、2.0cm の 15、3.0cm の 16 に分けられる。11 - SK41. 12 - K-07. 13 - SE05. 14 - SE15. 15 - A-1 I 層. 16 - SE16 出土である。

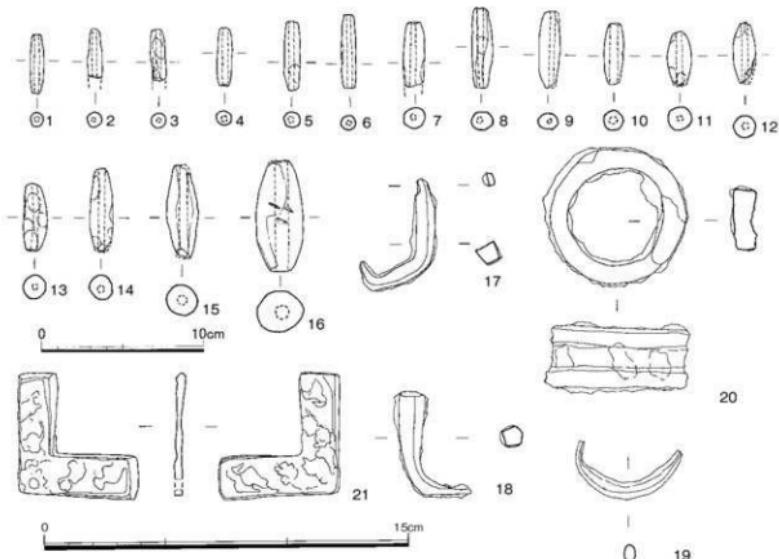
**鉄製品（第18図）釣針（17～19）** 17 はチモト、針先が残存し、残存長 4.6cm を測る。Pit279 出土。18・19 は両端を欠失する。18 が SE55、19 は SE14 出土である。輪状鉄製品（20）径 5.8cm、厚さ 1.0cm、高さ 2.7cm を測り、側面に凹線をめぐらす。SE16 出土である。

**銅製品（第18図・図版9）飾金具（21）** 一辺 5cm の L字形を呈し、厚さ 2mm、裏表とも 1～



第17図 Pit・包含層出土遺物実測図（縮尺1/3）

2mm幅で縁がめぐり、両端は三角縁に仕上げる。裏表に文様が鋳出されているが、鋳が著しく不明瞭である。外側の角から5mmに径4mmの孔を2ヵ所穿つが、鋳によりふさがっている。この2ヵ所以外に穿孔ではなく、文様が両面に鋳出されていることから、飾金具の他、孔に紐を通して懸垂し、馨や風鐸の風招として用いられた可能性もある。



第18図 出出土製品・金属製品実測図（縮尺1/3・1/2）

No.	番号	造 構	銭 名	初 誕 年	備 考	No.	番号	造 構	銭 名	初 誕 年	備 考	No.	番号	造 構	銭 名	初 誕 年	備 考
1	2	SE02	元祐通寶	1086		4	9	SE15	崇寧通寶	1094		7	15	SE55	□□通○		井戸枠内
2	5	SE05	太平通寶	976		5	10	SE16	熙寧重寶	1071	折二銭	8	16	SK56	崇寧重寶	1103	当十銭
3	7	SE05	□□□			6	13	SX34	天□通寶			9	17	A-2-1層	崇寧重寶	1103	当十銭

第1表 銅銭一覧表

銅銭（図版9・第1表）全体的に鋳が著しく、残存状態が良好なものについてはX線写真で示す。判読できた北宋銭9点中、大銭が3点と高い比率を示す。

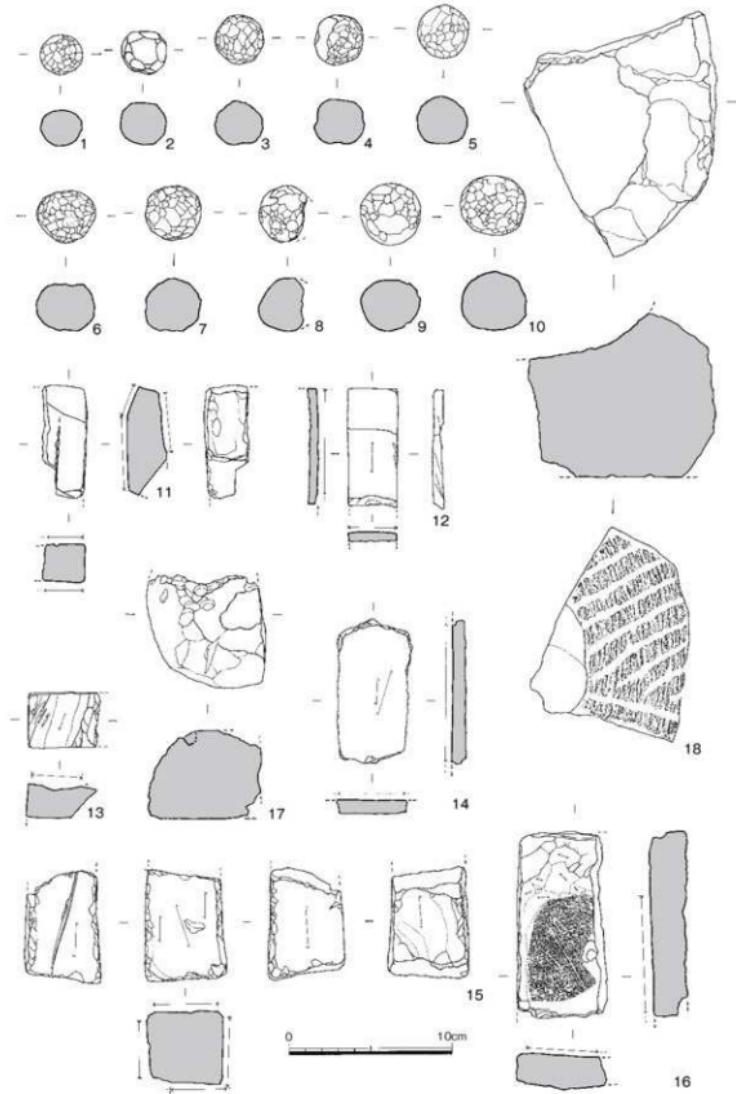
#### 石製品（第19図）

石礫（1～10）径2.2～3.6cmの球形に加工する。石材は砂岩である。1・5 - SE30. 2～4 - A-2 1層. 6 - SE01. 7 - SE48 井戸枠内. 8 - SK46. 9 - SK04. 10 - SX34 出土。

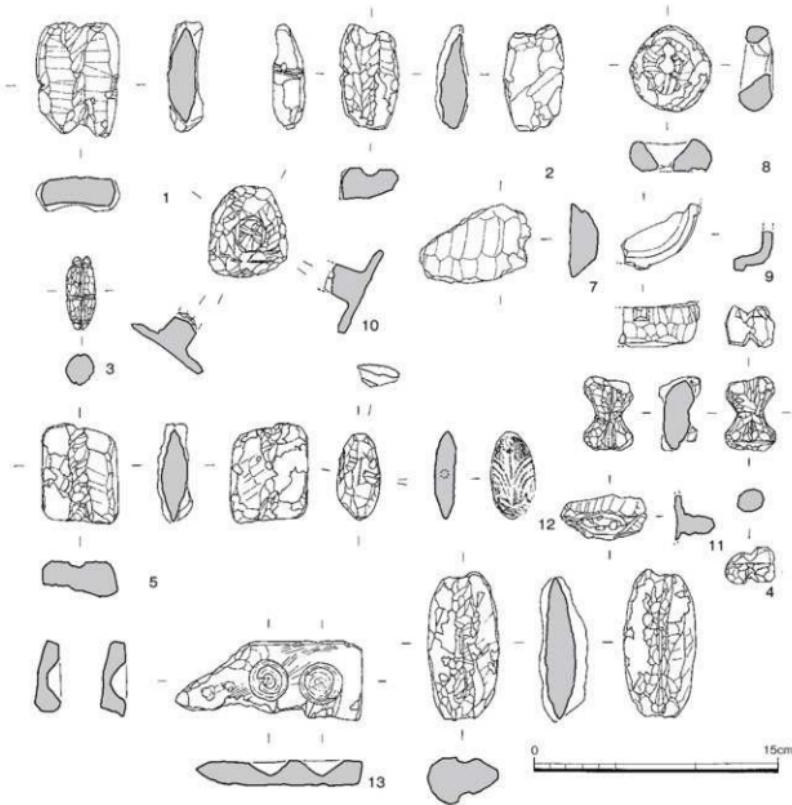
砥石（11～16）11は残存長7.0cm、残存幅2.7cm、厚さ2.4cmの砂岩製で、4面の内2面が欠損、剥離し、残る2面は砥面である。SE33出土。12は残存長7.1cm、幅3.1cm、残存厚6mmの粘板岩製で、上面を砥面とし、下面は剥離、両側面は研磨仕上げされているが、使用痕はみられない。SE02出土。

13は残存長4.4cm、幅3.4cm、残存厚2.0cmの砂岩製で、上面を砥面とする。SE48 井戸枠内出土。

14は残存長9.0cm、幅4.5cm、残存厚8mmの砂岩製で、上面を砥面とし、両側面は欠損、下面は剥離している。SE04出土。15は残存長7.0cm、幅5.0cm、厚さ4.5cmの輝緑凝灰岩製で、4面を砥面とする。SE01出土。16は残存長11.2cm、残存幅5.5cm、厚さ2.0cmの粘板岩製で、上面を砥面



第19図 出土石製品実測図1 (縮尺1/3)



第20図 出土石製品実測図2(縮尺1/3)

とし、両側面は欠損、剥離、下面は粗く平坦面を作る。K-02出土。

軽石製品(17)半球形に成形した製品の断片で、厚さ5.4cmを測る。SE55出土。

石臼(18)上臼で約1/4残存し、残存厚10.0cmを測る。SE02井戸枠内出土。

滑石製品(第20図)いずれも石鍋片を再加工したものである。

石錐(1~6)1~6是有溝石錐で、長軸の両端に切り欠き、その間に溝を入れる。1・2は側面にも切り欠きを入れる。1は方形を呈し、全長7.0cm、幅5.0cm、厚さ1.8cmを測る。SE33出土。2は梢円形を呈し、残存長5.4cm、幅3.5cm、厚さ1.9cmを測る。A-2 I層出土。3は紡錘形を呈し、両端部と中間部にも長軸と直交する方向に溝をめぐらす。全長4.4cm、最大径1.8cmを測る。Pit08出土。4は中央部がくびれた糸巻き形を呈し、全長4.5cm、最大幅3.0cm、くびれ部径1.5cmを測る。Pit293出土。5は方形を呈し、全長6.1cm、幅4.8cm、厚さ2.1cmを測る。A-2 I層出土。5は梢円

形を呈し、径 5.0cm、幅 4.4cm、厚さ 3.0cm を測る。A-2 I 層出土。

その他滑石製品（7～13）7 は断面台形に面取りされる。用途は不明。Pit357 出土。8 はすり鉢状に穿孔された円盤状石製品、径 5.0cm、厚さ 2.0cm を測る。SE55 出土。9 は口縁部に縦耳が付く石鍋のミニチュア、Pit248 出土。10・11 は石鍋補修のための鍛状石製品、11 - Pit182. 12 - SK47 出土。12 は撮みが付いた梢円形のスタンプ状石製品で、印面には草花文が刻まれる。全長 5.4cm、幅 2.7cm、厚さ 1.2cm を測る。SX34 出土。13 は火きり白石製品である。径 2.5cm、深さ 1.3cm の円錐形の孔を 2 カ所穿つ。残存長 11.4cm、残存幅 4.9cm、厚さ 1.5cm を測る。SE15b 出土。

## IV 小 結

**遺構の時期** 今回の調査で、まとまった量の土器や陶磁器が出土し年代推定が可能な遺構は以下の通りである。

12 世紀後半～ SE28 SK11/14/60/71 13 世紀後半～ SE01/02/03/06/33 SX34  
SK12/41/47/50/56/58

14 世紀前半～ SK10/46

12 世紀後半の井戸 1 基・土坑 4 基、13 世紀後半の井戸 5 基・土壙墓 1 基・土壙 6 基、14 世紀前半の土壙 2 基である。遺構が密に分布していたのは 13 世紀後半、次いで 12 世紀後半となる。

**他地域から搬入された土器** SX34 から在地産のものとは大きく異なる形態をとる土師器（第 15 図 85）が出土している。口径 8.9cm・高さ 1.4cm の小皿で、厚さ 1.0cm と肉厚な底部から端部を細くおさめる口縁部が短く延びる特徴をもつ。SK50 出土の土師器小皿（第 15 図 61）は厚底で、先の小皿 85 ほど口縁部は短く延びず、在地産の特徴を併せ持つ形態である。在地産と異なる広域流通品でない土器の出土は、他地域からの人の動きを示すものである。箱崎遺跡において畿内土器は九州北部では他を圧する頻度で出土している。次いで、豊前系土師器も少なからず散見される。それ以外の地域で箱崎と深い関係をもつ地域として、薩摩・大隅が挙げられる。蒙古襲来を受けて石築地が築造されるが、箱崎地区は薩摩国御家人に石築地役、異国警固番役が割り当てられている。また、延喜式神名帳に鹿児島神社として、九州南部（日向・薩摩・大隅）で唯一の大社に列せられ、11 世紀後半には八幡正宮と称されるようになる大隅正八幡宮との関連も看過できない。九州南部の土器を広く実見した訳ではないので断定することはできないが、厚底で細く短い口縁部が付く土師器については九州南部からの搬入品である可能性が強い。

**砧青磁の出土** 13 世紀後半の遺構からは、博多遺跡群でも聖福寺周辺域などまとまって出土する区域が限られている希少な南宋後半の龍泉窯青磁の中でも上手物とされる砧青磁が、高い頻度でみられた。厚く施釉され、断面三角形（細めの台形）の高台先端の釉をカキ取り露胎とし、蓮弁文や高台の削りが鋭い大宰府分類で III 類とされるもので、体部から口縁部までゆるやかに内湾し立ち上がり、口縁部に輪花を刻む無文碗 III-1、体部外面に幅が狭い鶴蓮弁を削り出す端反りの小碗 III-2c、内外面とも無文の腰折杯 III-1a などが出土している。什器、日常生活用品とされる碗や杯の他には、鬲形香炉片、外面に八卦文を削り出す壺形香炉片が出土している。北東に近接する第 24 次調査においても、龍泉窯青磁貼付双魚文折線盤・杯・皿など優品が出土している。13 世紀後半から 14 世紀前半にかけて、博多遺跡群や周辺の集落では当該期に位置付けされる土師器やそれに伴う口禿白磁が出土する遺構が数多く検出されているが、砧青磁は稀で、受容層は限定されている。他に什器以外の陶磁器では、SX34 から白磁僧形人物像胸部片が出土している。信仰の対象とされたものが、破損し廃棄され

たものと考えられる。1323（至治3）年に寧波を博多へ向け出港したものの、韓国新安沖で沈没した「新安沈船」からは1万8千点に及ぶ陶磁器、銅銭28t、木簡318点などが引き揚げられている。木簡7点には勘進聖教仙に関する付札があり、内1点に「菖崎奉加錢」と記されている。このことから、寺名を記した木簡が41点確認されている東福寺など交易の施主となる寺社の一つとして、菖崎宮が関わっていたと推測される。「綱司」の名称を記す木簡が109点確認されているが、13世紀後半から14世紀前半にかけての高級磁器のまとまった出土が聖福寺周辺区域などに限られることから、博多居留の宋商人を示すものとは考え難い。今回の調査を含め博多遺跡群や箱崎遺跡出土の砧青磁は新安沈船の前段階13世紀後半のものがほとんどであるが、この時期にも主体的に貿易に関わることにより、高級磁器など輸入品を有利に入手し、什器や仏具として使用できる立場にあったのであろう。

**大銭の出土** 新安沈船で引き揚げられた銅銭は残存状態不良なものが多く、その全貌については明らかでない。大銭と小銭の比率についても不明であるが、博多に建立された承天寺塔頭「釣寂庵」の名が記された付札木簡には大銭八貫とあり、日本では貨幣として使われなかった折二銭・当十銭といった大銭を求めている。渡来銭は貨幣としてだけではなく、銅地金としても利用されている。鎌倉大仏（吾妻鏡によると1252（建長4）年に铸造が開始されたとされる）の成分分析では宋銭の成分に近い数値が得られており、銅銭を铸造した説が提唱されている。寺社造営料唐船の名目である寺社造営に際しては仏具など銅製品の製作が必要であり、その材料として求めたものもあったであろう。今回の調査で判読可能な銅銭の内、折二銭の熙寧重寶（直径3.1cm）1点、当十銭の崇寧重寶（直径3.4cm）2点の計3点、大銭が出土している。内2点は13世紀後半の遺構から出土した。決済通貨として使用したのではなく、地金として入手したもの的一部か。

**石礫の出土** 同時期の遺構からは土錘、石錘、釣針など漁労具の他、石礫が10点出土している。調査面積500m<sup>2</sup>未満では突出した出土量である。当調査地一帯、箱崎遺跡の北西側南北300m、東西100mの範囲では13世紀後半の焼土層が確認され、今回の調査では確認されなかつたが、隣接する第24次調査などで二次被熱し焼けただれた陶磁器が数多く出土している。1274（文永11）年の蒙古襲来による兵火の広がりを示すものであろうか。砂岩を2.2～3.6cmの球形に加工した石製品について本来は木製の毬杖玉と報告される例もあったが、戦乱に際して用いられた殺傷力が高い投てき武器である石礫と見なす。出土状況は1遺構でまとまって出土したものではなく、井戸や土坑など遺構の埋土や部分的に残る遺物包含層からの出土で、出土した遺構は調査区内では偏りなく分布している。欠損した石礫もみられ、投てき後回収されることなく放棄され、自然に埋没したものであろう。

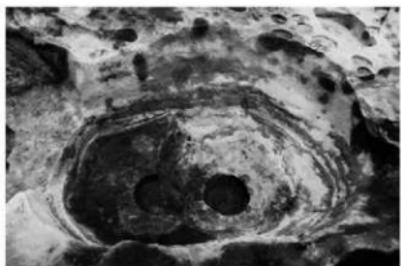
**町割りの復元と遺構の方位** 箱崎遺跡で道路遺構の検出例は開発に伴う発掘調査がほぼ街区に限られていることもあって希少である。菖崎宮の創建以来展開してきた町割りが現在まで踏襲され、道路に囲まれた街区に道路遺構が延びていないことに因るのであろう。側溝など道路に付随する遺構についても、近代以降都市化の進展とともに道路が拡幅され現道内に取り込まれたためか、検出例が少ない。本市では条里制の景観が現在もなお残る平野部で、大規模開発や道路改良といった調査原因で現道部分の調査が可能となり、坪境の溝など条里地割りに関連する遺構が検出された例が多々みられた。道路以外に町割りの復元に資する遺構としては、街区内の区画溝や遺構の主軸方位に限られる。今回の調査で検出された掘立柱建物・溝・土壤墓など13世紀後半に位置付けされる遺構の主軸方位は真北から25°東に振れ、周辺の地割の方位と同じくする。創建以来の町割りについても、南北に長い砂丘の軸線に沿った幹線道路から支道が分岐する現道に近い形態を取っていたと推測する。



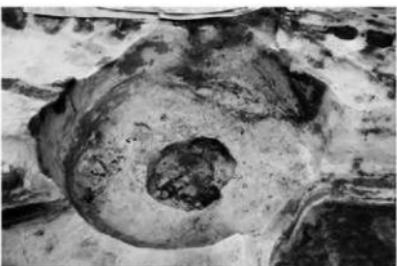
1. 箱崎遺跡第 96 次 A-1・2 区全景（北東から）



2. 箱崎遺跡第 96 次 B-1・2 区全景（北東から）



3. SE06・07 井戸（南東から）



4. SE03 井戸（北西から）



5. SK11 土坑（東から）



6. SK12 土坑（東から）



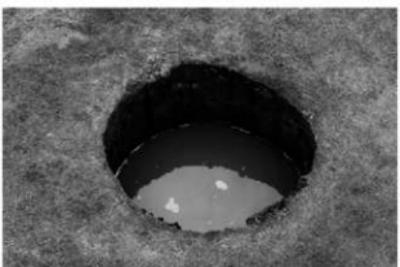
1. SE15 井戸（東から）



2. SE15b 井戸枠（東から）



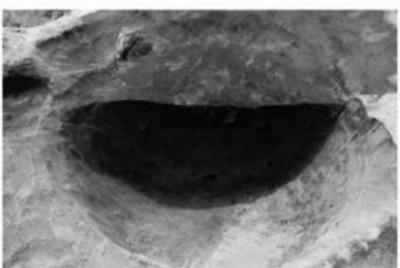
3. SE30 井戸（北西から）



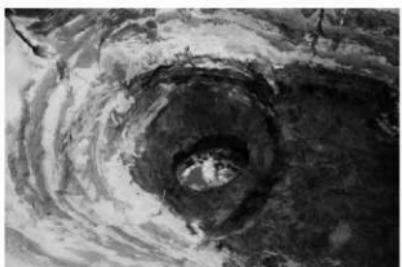
4. SE30 井戸枠（北から）



5. SE31 井戸枠（北から）



6. Pit95 土層（北から）



7. SE07 井戸（西から）



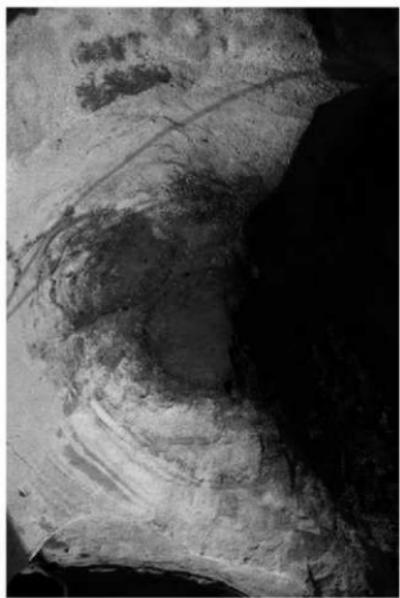
8. A-1 区柱穴群（南西から）



1. SA18 (北西から)



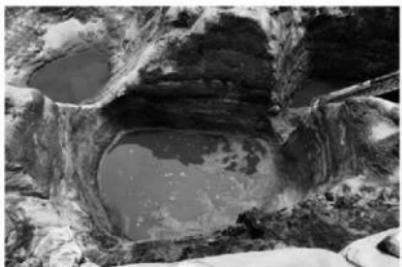
2. SK14 土坑 (北から)



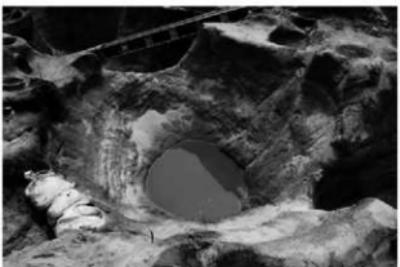
3. SE16 井戸 (北東から)



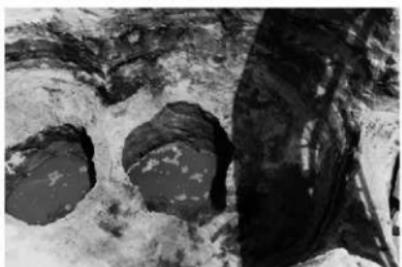
4. SK14 土坑下面 (北から)



1. SE04 井戸（北西から）



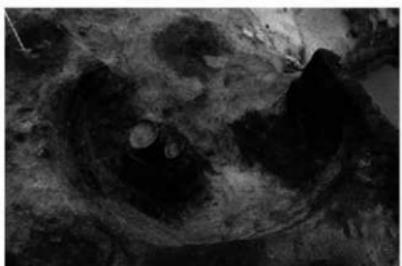
2. SE01 井戸（北西から）



3. SE06 井戸（西から）



4. SE03 井戸（西から）



5. SK10 土坑（南から）



6. B-I 区全景（北東から）



7. SE42 井戸（北から）



8. SE33 井戸（南東から）



1. SX34 土壙墓（北西から）



2. SX34 土壙墓完掘状況（北西から）



3. SE48/55 井戸（南東から）



4. SE38 井戸（南東から）



1



2



4



5



21

# 報告書抄録

ふりがな	はこざき 65							
書名	箱崎 65							
副書名	箱崎遺跡第96次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1458集							
編著者名	佐藤一郎							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2022年(令和4年)3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因	
はこざき い ゃき 箱崎遺跡 (第96次調査)	ふくおかし ひづれくにこうづく 福岡市東区箱崎 1丁目2928番、 2929番1	40131	2639	33° 35' 42"	130° 25' 23"	20190603 ～ 20190921	482m <sup>2</sup>	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
箱崎遺跡	集落	中世	井戸・土坑・溝	土師器・須恵器・陶磁器・石製品・金属製品				
要約	<p>箱崎遺跡は福岡平野東部、多々良川水系の宇美川河口部左岸に位置し、博多湾岸沿いに形成された古砂丘上に立地する。篠崎宮創建以降、その門前町として発展してきた。調査地は遺跡の北西、砂丘前面域の最高部よりやや下がった位置に当たる。標高3.0m前後の黄灰色砂上面で、12世紀後半～13世紀後半の溝6条、井戸15基、土坑35基、柱穴・ビット状遺構400個余りを検出した。溝はいずれも幅0.3m前後で、1条を除き東に30°振れた現況の町割りと同じ方位である。調査区分南西隅で検出した溝は延長9m、現況の町割り方位より10°西に振れやや弧状に曲がる。土坑は径1～2mの不整円形、梢円形のものがほとんどで、多くは廃棄土坑とみられる。その内、完形の土師器小皿・杯が数点出土した土坑が10基みられた。土師器の多くは生活用品で、その他神饌用とみられるものもある。柱穴・ビット状遺構は400個余り検出した。調査区北東と南側で密に検出された。後世の井戸や土坑等に切られ、建物や柱列としてまとめられたものは10棟程度にとどまる。現況の町割りと同じ方位の一群と、さらに東に10°振れる一群とに大別される。遺構から出土した遺物の大部分は土師器であるが、13世紀後半の遺構からは博多遺跡群でも希少な南宋後半の龍泉窯青磁片が、高い頻度でみられた。</p>							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1458集

## 箱崎 65

- 箱崎遺跡第96次調査報告 -  
2022年(令和4年)3月24日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 株式会社ミドリ印刷  
福岡市博多区博多駅南6-17-12